

〈論文〉

文化的反義語

—— 日本人学生への調査より ——

山 田 政 通

要 旨

本稿の目的は、大学生が日本語でどのような文化的反義語を意識しているかの実態を調査し、その結果を分析し報告することである。まず、文化的なコンテキストに依存する二項対立として文化的反義語を定義し、調査目的や方法を解説した後に、調査結果の詳細な分析を提示した。その上で、収集したデータ全体を概観し、出現頻度が高かった文化的反義語のペアを詳しく解説した。さらに、ジャンル別に文化的反義語を分析し、前項の選択や回答者の属性に起因するペア選択のバイアス傾向にも触れた。また、文化的反義語の中でも、文化の反映の度合に差があることに注目して、日本文化特有なペアと普遍的なものを区別して示した。最後に、今回の調査で出現頻度が高かったペアと山田(2019)で紹介した例とを比較し、その違いを指摘した。本稿の調査で日本人大学生がどのような文化的反義語を意識しているかが実証されたことは、今後の研究の参照点となり、大きな意義があるであろう。

今後の課題としては、日本語学習者の文化的反義語の理解度を検証することとそれに基づいた指導法の提言をすることである。さらに、研究の方向性としては、文化的反義語を異文化語用論の領域に位置づけ、さらに体系的に研究することが望まれる。

キーワード：文化的反義語、コンテキスト、二項対立、バイアス（片寄り）、異文化語用論

目 次

1. はじめに
2. 文化的反義語とは
3. 文化的反義語の調査と分析
 - 3.1 調査目的
 - 3.2 調査方法
 - 3.3 調査結果と分析
 - 3.3.1 全体の分析
 - 3.3.2 高頻度ペアの分析
 - 3.3.3 その他の分析
 - (1) ジャンル別分析：(a) 移動手段・乗り物 (b) 地域名・地名
(c) 筆記用具
 - (2) バイアス（片寄り）：(a) 前項バイアス
(b) 回答者の属性バイアス
 - (3) 文化の反映度
 - (4) 山田（2019）との比較
 - 3.4 まとめ
4. 終わりに
- 参考文献
- 資 料

1. はじめに

Hofmann (1993: 40) は、多くのアメリカ人にとって *mountain* の反対は *valley* であるのに対し、日本人の多くは山の反対は海であると答える、と報告している。言語文化が違くと反義語のペアに違いが生じるという指摘は、著者にとって新発見であり、このような文化的な背景に基づいた反義語を「文化的反義語 (cultural antonyms)」と命名し、研究を重ねてきた。まず、Yamada (2009) では、反義語の扱い方について、従来の伝統的な3分類に加え、この文化的反義語の必要性を説いた。続いて、山田 (2015) で第4のカテゴリーとしての文化的反義語の特徴を詳細に論じた。そし

て、山田（2017）では英語の実例をまとめ、山田（2019）では、それに対応する形で日本語の例を示した。以上のように文化的反義語の輪郭と著者自身が収集した実例を提示した上で、本稿では、大学生への調査に基づき、実際にどのような文化的反義語が日本語の中で意識されているのかを明らかにしたい。

まず、次節で文化的反義語の定義を示し、3節では今回の調査の概要を解説し、その後、調査結果の詳細な分析を提示する。高頻度のペアの分析の後、ジャンル別の分析、バイアス現象や文化の反映の度合の差などに触れ、最後に本調査と山田（2019）の相違点に言及する。

2. 文化的反義語とは

本稿のテーマである文化的反義語を「元来はあるカテゴリーの下位語として多項非両立性の関係にある二語が、実際の言語使用のコンテキストで選択肢がその二つに限定され、あたかも相補的反義語のように扱われる例」と定義する（山田 2015: 154）。下記の図1で示したように、*山／海*（反義語ペアは A/B の形で示し、 A を「前項」、 B を「後項」と呼ぶ）の対比を例にすると、「地形」の下位語としては、その他にも *川*、*谷*、*里*、*野*、*陸* など複数の語が多項非両立性の関係で存在すると考えられる。しかし、先に紹介した Hofmann の指摘のように、多くの日本人にとって、最初の二つがあたかも相補的反義語のように対比的に意識されて、「山の反対は？」と尋ねられると多くの日本人は「海」と答えるであろう。最初の二つに意識が集中すると、この二つが相補的な二者択一の関係になり、二項対立を示す反義語のように扱われると考えられる（田中（2005: 84）の指摘のように、それぞれ個人の言語体験には違いがあり、「川」、「谷」などと答える日本人もいるであろう。文化的反義語の特徴の一つは、ペアの語の組み合わせにはバリエーションがありうるという点である）。



図1 文化的反義語としての山／海

高い／低い (*high/low*) などの一般的な反義語（「標準的反義語」“canonical antonyms”, Jones et al. 2012: 13 と呼ばれる）がコンテキストに中立的であるのに対して、文化的反義語はコンテキストに依存的な特徴があると言われる（Murphy 2003: 174）。上記の定義に「実際の言語使用のコンテキスト」とあるのはその為で、コンテキストの背後には、言語使用者がその文化の中で経験したことが大きく関わってくる。先に挙げた山／海の対比に関しては、Hofmann (1993: 40) が指摘するように、多くの日本人は、これまで山と海に挟まれた限定された地域で生活してきたので、自然と山と海を対照的に捉えるようになったのであろうと推測される。

3. 文化的反義語の調査と分析

3.1 調査目的

本調査の目的は、大学生（20歳前後の若者）が、日本語でどのような文化的反義語を意識しているかという実態を調査し、その結果を分析し報告することである。その上で、以下の2点に注目する。まず、著者自身がこれまで収集してきた例（特に山田 2019）との相違点を確認し、その背後にある傾向や理由を考察する。さらに、文化的反義語の特徴を明らかにするための新たな視点や方向性を探る。

3.2 調査方法

大学生にアンケート形式で、思いつく文化的反義語の例を用紙に書いて

もらった。

・調査実施状況

- －実施日時：2017 年 9 月 20 日（水）16:00～16:20
- －実施場所・時限：拓殖大学八王子国際キャンパス，C101 教室（4 時限
目 15:00 より 90 分）
- －対象者：連続講座「世界の中の日本」（学部横断型の一般教育教養科目の一つ）の受講学生で日本語が母語の 104 名（受講生には，日本語が母語でない外国籍の学生 3 名（皆中国語）が含まれていたが，分析からは除外した）
- －実施状況：連続講座「世界の中の日本」の中で著者が担当した「最新 2017 年版・世界の言語事情」の講義の最後の 20 分を利用した。アンケートの最初に回答者の属性として，(1)年齢，(2)出身地・出身国，(3)性別，(4)母語（日本語以外の場合のみ）を記入してもらった。
 - ・学年：1 年生 76 名，2 年生 11 名，3 年生 9 名，4 年生 8 名，計 104（学年は別途出席情報の提供あり）：1 年生が 73.1%，1，2 年生で全体の 83.7%を占めた。
 - ・年齢：18 歳 42 名（40.4%），19 歳 31 名（29.8%），20 歳 12 名（11.5%），21 歳 14 名（13.5%），22 歳 4 名（3.8%），23 歳 1 名（1.0%），計 104 名：18，19 歳で全体の 70.2%を占めた。
 - ・男女比：男 59 名（56.7%），女 45 名（43.3%）であった。
 - ・[まとめ] 年齢は，18 歳と 19 歳で全体の 70.2%（1，2 年生が 83.7%）が多数で，男女別は，男性の方が数%多かった。

・実施要領

調査当日の講義で著者は「最新 2017 年版・世界の言語事情」という題目で、メインテーマの英語と日本語の使用状況を母語話者の数やネット上での言語別の使用状況を解説した後、最後の 20 分を利用し、前半の 10 分で山田の文化的反義語の研究を紹介し、後半の 10 分で受講者に自分なりの例（10 例程度）を用紙（「講義のまとめと感想用紙の裏面」）に書いて提出してもらった。

その他の留意点を 2 点だけ記す。前節で文化的反義語の定義を示したが、学生への説明では、それを簡易化して「ある文化圏において、特定な場面で選択肢が二つに限定され、対比的に使われる語のペア」であるとし、実例を豊富（13 例）に示した（本稿末の資料を参照のこと。著者が学生に紹介した例は、本稿のデータ分析から除外した）。回答例から判断すると、ほとんどの学生は、文化的反義語をしっかりと理解してくれたようだ。また、この調査では、専門用語的な響きのする「反義語」は使わず、学生に馴染みがあり、理解しやすい「反対語」という用語を使用した（実は、英語の“antonym”に対応する日本語は「対義語」, 「反義語」, 「反対語」, 「反意語」などのバリエーションがあり（日本語文法学会・編者 2014 : 378）、どれを使うかは迷うところである）。

3.3 調査結果・分析

3.3.1 全体の分析

大学生からのデータ収集に際し、文化的反義語の判断基準としては、(1) 先の定義に合致するもの、さらに(2)通常の国語辞典（『広辞苑』[岩波書店]、『デジタル大辞泉』[小学館] など）に反義語としての記述がないペアとした。それらの辞典に反義語の記述があれば、それは文化的反義語でなく、先に触れた標準的反義語の可能性が高いからである。

アンケート集計結果

104名の学生からは、977の反義語のペアが収集できたが、その中には上記の基準に当てはまらないペアが66例あった。大別して3種類で、(1)標準的反義語（男／女、北／南、味方／敵など20例）、(2)対比の意味合いを感じないペア（充電器／スマホ、テレビ／リモコン、ラケット／ボールなど13例）、そして(3)意味不明のペア（酒／茶、たくあん／うめぼし、ナットウ／パンなど33例）である。以上のペアを除くと、最終的に収集できた文化的反義語は、911例で、104人から一人につき8.8例を集めることができたことになる。学生諸君に感謝したい。

語彙分析時の「延べ語数」(token)と「異なり語数」(type)の区別（中野他・監修 2015: 412-413）を参考に、文化的反義語ペアの延べ出現回数と異なり出現回数を算出すると、それぞれ911回と405回であり、それらが、本稿で分析対象となる文化的反義語のペアである。

ペアの提示方法については、ペアの前項と後項の順序や表記の違い（平仮名、カタカナ、漢字など）は原則として不問とし、出現頻度が最も高いものを代表として表示した。また、その頻度が同じ場合は、ペア前項の最初の文字のあいいうえお順にした。例えば、順序に関しては、都会／田舎は10例が確認されたが、その内2例は順序が逆（田舎／都会）であった。より頻繁に出現した前者を代表例として挙げた。また、表記については、ごはん／パンのペアは52例あるが、そのペアの前項には漢字表記のご飯が17例含まれている。

表1は、10例以上を集めた文化的反義語のペア15組を頻度順に表示したものである。表の右端には、参考としてそれぞれの文化的反義語が使用される対比のコンテクストが記されている。10例としたのは、104名の学生の約1割に相当し、個人的で特異な傾向を最小限に抑え、より一般的で全体に共通する特徴を掴みたいと考えたからである。この15組のペアで、述べ語数は253回に登り、総数911の27.8%に達し、全体の4分の1以上

に当たる。この 15 組を集中的に分析することで、全体的な傾向が見えてくるであろう。

表 1 文化的反義語ペアのトップ 15（出現頻度 10 回以上）

| 順番 | 頻度 | 文化的反義語 | | 対比のコンテキスト |
|----|-----|--------|----------|--------------|
| 1 | 52 | ごはん | パン | 主食の選択 |
| 2 | 27 | 肉 | 魚 | メインディッシュの選択 |
| 3 | 20 | 夏 | 冬 | 季節 |
| 4 | 18 | 犬 | 猫 | 身近なペットの代表 |
| － | 18 | スカート | ズボン | 下半身用の洋服（の分類） |
| 6 | 16 | えんぴつ | 消しゴム | 文具 |
| 7 | 15 | 赤 | 青 | 色彩 |
| 8 | 13 | 和式 | 洋式 | 様式の代表 |
| 9 | 12 | 晴 | 雨 | 天気 |
| 10 | 11 | サッカー | 野球 | スポーツの代表 |
| － | 11 | 北海道 | 沖縄 | 日本の地域 |
| 12 | 10 | 行ってきます | ただいま | 外出時の挨拶 |
| － | 10 | おはよう | おやすみ | 起床と就寝時の挨拶 |
| － | 10 | 都会 | 田舎 | 生活圏の区分 |
| － | 10 | めがね | コンタクトレンズ | 視力矯正の選択肢 |
| 計 | 253 | | | |

3. 3. 2. 高頻度ペアの分析

ここでは、出現頻度の上位 15 のペアについて詳細に分析し、それぞれのペアの特徴を明らかにする。

No. 1 ごはん／パン（52 回）

群を抜いて最も頻度が高かったペアは、ごはん／パンであった。全体の

911 のペア中、52 回の頻度で出現し、実に全体の 5.7% を占める。米／パン（15 回）も実質的に同様のペアであると判断し、ここに分類している。また、表記としては、平仮名のごはんは 20 回、漢字交じりのご飯は 17 回であった。

主食の選択肢としては、他に麺やパスタもあるが、多くの学生にとってごはんとパンの二つが代表的な主食となっていると考えられる。本来外来語のパン（ポルトガル語起源）が、最も頻度の高い文化的反義語の後項になっているという事実は、如何にこの食物が今の食生活に不可欠なものになっているかの証である。この対比は、和食／洋食のペア（7 回出現）に基づいているであろう。ごはんは和食と深く結びつき、パンは洋食の不可欠な要素となっている。

さらに一般化して考えると、日本式と西洋式の対比を示す和／洋のペアに行きつく。和は「大和国」（旧国名）を指し、洋は「西洋」の略である（『広辞苑』）。本調査でも、和／洋の対比を踏まえたペアとして、和式／洋式（13 回：No.8 のペアとして後述）、和服／洋服（4 回）、和風／洋風（3 回）、また、より具体的な対比として和式トイレ／洋式トイレ（3 回）があった。さらに、部屋の床の選択肢としてのたたみ（畳）／フローリング（6 回）のペアも、和／洋⁽¹⁾を基にしていると言えよう。

日本語学習者にとっては、和／洋の対比ペアを学ぶことは、多くの語と結び付く生産性の高い接辞のペアを習得することに繋がり、語彙拡大の上で重要であるだけでなく、日本文化の理解にも役立つであろう。Yule（1996）は「文化的スキーマ（cultural schema）」を「特定の文化での経験を基にした既存の知識構造（“pre-existing knowledge structure based on experience in a particular culture,” p.128）」と定義しているが、和／洋もそのような日本文化に関するスキーマの重要な一部を形成していると考えられる。さらに一般化すれば、ここで扱う他の文化的反義語も、程度の差はあれ、そのような文化的スキーマの構成要素であろう。

No. 2 肉／魚 (27 回)

2 番目に頻度が高かった対比は、肉／魚のペアで 27 回あった。これはメインディッシュの選択肢の代表例で、肉は洋食に、魚は和食に関係が深いので、和食／洋食の対比の具体例の一つと考えられる。西洋文化に触れる以前は、日本では肉食は一般的でなかったが、近年は、豚肉、牛肉、鶏肉、羊肉など豊富で種類が多く、メインディッシュとしては魚より食する頻度が高いであろう。魚も種類や調理法のバラエティーがあるが、肉を食べる頻度よりは低いことが、この順序に現れていると思われる（魚／肉の順は 3 例のみ）。また、肉は肉／野菜というペアでも 7 回出現する。これは、食物の分類で、肉好きの人は、なかなか野菜を食べない傾向が強いという一般的対比に基づいているのかもしれない。頻度順の 1 位、2 位とも食べ物に関するペアであることは、大学生の日常生活での関心事の度合と無関係ではないと思われる。

No. 3 夏／冬 (20 回)

3 番目に頻度が高いペアは、夏／冬で 20 回出現した。通常季節は 4 区分されるが、その中で夏と冬が特筆され、対比的に捉えられている。夏の暑さと冬の寒さを中心に、夏の明るさと冬の暗さなどが、対比の基をなしているであろう。この対比に比べ、春／秋のペアは 5 回しか出現しなかった。春の新緑と秋の落ち葉などで対比の意味合いはあるが、夏と冬のペア程の対比の強さはないようだ。図 2 は、以上のことを示したもので、季節は春から時計回りで進行するが、その中で夏と冬が太い矢印で対比関係が顕著であることを示している。



図2 四季の対比関係：春，夏，秋，冬

先に，文化的反義語を「多項非両立性の関係にある二語が，実際の言語使用のコンテキストで選択肢がその二つに限定され，あたかも相補的反義語のように扱われる」ペアであると定義したが，4つの季節の中で，夏と冬が特別に対比の対象となることは，これに沿った現象である。後述するが，交通信号の3色の内，赤と青の2色に対比（それぞれ“stop”と“go”を意味する）の焦点が集まる現象も同類であろう。

No. 4¹ 犬／猫（18回）

18回出現し，第4番目に頻度が高いペアは，二つあった。まず，身近な動物の代表として，犬／猫の対比である。現在ペットの種類は多様化しているが，家庭用のペットとしては，いまだに犬と猫が大きな存在感を示している⁽²⁾。表記のバリエーションとしては，漢字表記が圧倒的に多かったが，他に平仮名書きが2例，カタカナ書きが1例あった。また，森岡（2005：69）は，犬／猫は敵対関係を示すと述べている。英語でも *cat / dog* という対比があり，山田（2017：280）では，慣用表現 (*fight like cat(s) and dog(s)* [激しく戦う・口論する] や *rain cats and dogs* [土砂降り]) を挙げて解説している。

No. 4² スカート／ズボン（18回）

もう一つは，スカート／ズボンである。腰から下の下半身用洋服の男女

別の分類で、スカートは女性用、ズボンは男性用である。このペアの回答者 18 人中 14 人が女性で、スカートを最初に記している回答が多かった（10 回）ので、この順で表示している。女性にとって身近なスカートが前項として最初に出現していると解釈できる。後述となるが、これは、回答者の属性バイアスの一つで性別による片寄りである（bias「片寄り」については、3.3.3 で解説する）。有標理論の観点からすると、男性である著者にとっての「無標」の回答は、順序を逆にしたズボン／スカートである。女性に身近なものとしては、他にピアス／イヤリングが 5 回でてきたが、回答者はすべて女性であった。

また、山田（2019: 247）には、女性の服装の分類としてスカート／パンツというペアを示したが、今回の調査では、この例は出現しなかった。

No. 6 えんぴつ／消しゴム（16 回）

頻度で 6 番目のペア（16 回）は、文具のえんぴつ／消しゴムであった。表記のバリエーションとしては、前項は平仮名書きが 13 例と圧倒的に多く、漢字書き（鉛筆）が 2 例、えん筆が 1 例あった。また、後項については、消しゴムが 9 例、平仮名書きのけしごむが 4 例、けしゴムが 2 例、さらに消しごむが 1 例と、4 種のバリエーションがあった。

多くの学生にとって、鉛筆と消しゴムは身近な文具であろうが、実際の使用頻度を考えると大学生としてよりは、むしろそれ以前の小学生、中学生、高校生の時の経験が基になっている可能性が高いであろう。対比としては、鉛筆は文字を書く、消しゴムはそれを消すという反対関係が関わっていると思われるが、このペアについては、ただ単に一緒に使用すること起因する並列ペアで、対比（contrast）の意味合いはないのではないかという見解もあり、さらに詳細な調査の必要がある⁽³⁾。

No. 7 赤／青（15回）

頻度が7番目に多かったペア（15回）は、赤／青であった。赤と青は、白と黒と共に古代日本語において4つの基本色彩語体系を構成する重要な語であった。現在、日常生活で赤と青の対立が一番顕著に表れるのは、交通信号であろう。図3のように、信号は、元来3色体系で、日本語では「青、黄色、赤」の3色から成り立っている。ただし、黄色は、青から赤へ変わることを警告する一時的な役目を果たしていて、「進め」と「停止」を示す青と赤が、交通を制御する主要な対比であり、それが赤と青の対比として表現されている⁽⁴⁾。



図3 交通信号の3色：青，黄，赤

尚、他の色彩語のペアでは、赤／白と紅／白がそれぞれ5回ずつ出現している。日本語色彩語の文化的ペアについては、山田（2019）を参照のこと（p.241で赤／白を、また pp.251-252でその他の8つのペアを紹介している）。同様に、英語の色彩語に関しては、山田（2017）に記述がある。色彩語は、文化的反義語として多様な対比のペアを生み出す可能性があり、注目すべき語彙群である（実際、北原・東郷（1989）には「赤」や「青」などの基本色彩語について、複数対照語が掲げられていて参考になる）。

No. 8 和式／洋式（13回）

8番目は、13回出てきた和式／洋式のペアである。No.1のごはん／パンの解説でも述べたが、さまざまな事物の様式の代表として、日本式と西

洋式の二つは対比的に使用される。可能性としては、他にもアジア式、中東式、南米式、北米式、アフリカ式など多様な選択肢があるはずであるが、現実にはこの二つが対比の代表となっている（尚、注（1）で報告したように、このペアは、『デジタル大辞泉』には対比の記述があるが、『広辞苑』にはないので、本稿での分析対象となっている）。

No. 9 晴／雨（12回）

9番目は、12回出現した晴／雨である。天候・気象状況には、晴と雨以外にも曇りや雪などがあるが、その中で晴と雨が天候を代表する対照的なペアとして捉えられている。事実「晴雨」という表現があり、「晴雨にかかわらず」という言い方がよくなされる（英語でも、順序は逆であるが *rain or shine* という表現がある）。

No. 10¹ サッカー／野球（11回）

11回出てきたペアは二つある。まずは、メジャーなスポーツの代表格として、よく対比的に捉えられるサッカー／野球のペアである。勿論、他にもバスケットボール、バレーボール、テニス、相撲などのスポーツもあるが、一般的な人気やマスメディアでの注目度、テレビ等で中継放送される頻度などから判断すると、この二つが圧倒的な地位を占めていて、そのことが反映されたペアであろう。11例中、6例は標記の通りサッカー／野球の順で、残りの5例は野球／サッカーの順であった。例数が限られていて一般化には限度があるが、前項により注目度の高い語が来る傾向を考えると、両者は伯仲しているものの、学生の間ではサッカーが一枚上手を取っていることになる。これは、日本におけるスポーツの変遷と一致する。野球は長年不動のナンバーワンの地位を占めてきたが、近年サッカーがプロ化すると共に、若者を中心に人気が急上昇している。（ただ、テレビやラジオ中継やマスコミでの報道は未だに野球中心である）。

盛んなスポーツは、それぞれの言語文化で違いがあり、同じ英語文化圏でもイギリスの場合はサッカー／ラグビー（イングランドではクリケットも）であろうし、アメリカではアメフト／野球（またはバスケット）と違いがあるだろう。また、同じ文化圏内であっても、地域により差がありうるし、年代差もあるであろう。

また、このペアは回答者 11 人中 10 名が男子学生で、女子学生は一人のみであった。一般的にスポーツは男性に好まれるトピックであると言われるが、それを裏付ける結果である。男女の会話スタイルの違いを論じた Tannen (1994: 65) は 男性が好む雑談 (small talk) のトピックとして、スポーツの話 (sports talk) を挙げている。Tannen は、アメリカでの状況について述べているが、日本にも当てはまりそうだ。

No. 10² 北海道／沖縄 (11 回)

もう一つ 11 回出てきたペアは、北海道／沖縄である。日本列島の両極の地域を示し、日本国中という意味で、「北は北海道から、南は九州、沖縄まで」というような慣用表現でよく使用される。順序が逆の沖縄／北海道も 2 例あったが、圧倒的に北海道が先にある例が多かった（英語の類似表現は、山田 (2017: 277-278) を参照のこと）。

反義語のペアが、頻繁に使用される表現として「A から B まで」（英語の from A to B）という枠組みがある。その際の前項と後項の配列には、方向性として南北と東西の 2 方向が考えられる。北海道／沖縄は、南北軸で、北から南への方向性を示している。イギリス英語にも、*Land's End* / *John o'Groats* というペアがあり、それぞれイギリス本土の南端（西南端）と北端と考えられている地名で、*from Land's End to John o'Groats*、又は地名を逆にして *from John o'Groats to Land's End* としても使用されるようで、双方向性があるようだ（東西軸については、後で関東／関西、東京／大阪の解説のときに触れる）。

No. 12¹ 行ってきます／ただいま (10 回)

12 位から 15 位は、すべて 10 回出現した 4 つのペアが占めた。これから取り上げる 2 つは、どちらも挨拶表現のペアである。行ってきます／ただいまは、外出時と帰宅時の挨拶のペアで、外出する人が家に残る人に向かって言う。それに対して、家にいる人が、外出する人に向かって言う挨拶は、行ってらっしゃい／お帰り（なさい）のペアで、3 回出てきた（大学生にとっては、外出する人としての言語使用の経験が圧倒的に多いことが推測できる）。この二つの挨拶の例は、日本の日常生活での家庭や親子間の習慣を示す定型表現で、日本の文化理解に重要な文化的反義語ペアであろう。

このペアの前項と後項は、時の経過に沿った順序で表現されていて、他のペアのように逆になることはない（次例のおはよう／おやすみも同様）。Yule (1996: 86&134) は、スクリプト (script) を、繰り返し経験する出来事に関する、時系列的に順序づけられ、体系化されたスキーマ（知識構造）であると特徴づけているが、このペアはまさにそのようなスクリプトに裏打ちされた文化的反義語である。

山田 (2019: 253) には、上記の 2 例を含め、他の挨拶表現のペア（いただきます／ごちそうさまなど）も紹介しているので、参照されたい。

No. 12² おはよう／おやすみ (10 回)

これは、一日の始めと終わりの挨拶表現のペアで、それぞれ起床時と就寝前のことばで、時系列のスクリプトに沿っている。このペアは、多くの言語に幅広く存在する普遍性の高いペアであろう。より丁寧なバリエーションとしておはようございます／おやすみなさいというペアも 2 例あった。

No. 12³ 都会／田舎（10回）

生活圏の二大区分として、*都会*と*田舎*を二項対立で捉えるペアである。本来、両者の間には多様な中間地域がある筈であるが、発展地域と後発地域という両極を捉えた対比である。森岡（2005: 71）が指摘しているように、反義語には現実世界の多様な実態を単純化し、安易な二者択一の判断を強いる働きがあるが、その一面が出ているとも言えるかもしれない。同様に、英語にも *town / country*（イギリス英語）や *city / countryside*（アメリカ英語）という対比がある（詳細は、山田 2017: 266 を参照のこと）。

No. 12⁴ めがね／コンタクトレンズ（10回）

視力を矯正する方法としての通常の選択肢としてのペアである。表記のバリエーションとしては、*メガネ*（2例）、*眼鏡*（2例）、*コンタクト*（4例）などがあった。

以上、本調査で出現頻度が10回以上の文化的反義語ペアの15組を取り上げて、解説した。以下では、それ以外の分析結果を示す。

3. 3. 3 その他の分析

ここでは、4つの分析結果を報告する。まずは、(1)で文化的反義語のジャンル別分析、次の(2)では今回の調査で明確になったペアの構成に関するバイアス（片寄り）について取り上げる。続いて(3)では、特定の文化がどの程度ペアに反映されているかの視点から反義語ペアを再検討し、最後に(4)で、今回の調査結果と山田（2019）で紹介したペアの比較をする。尚、ここで扱う文化的反義語は、出現頻度が10回に満たないペアの中で、且つ2回以上出てきた例に限定する。特に後者に限定する理由は、既述の通り「反義語意識は個人差が大きい」ので、出来るだけ偶然を排し、客観性を高める必要があるからである。

(1) ジャンル別分析

ここではある特定のジャンル内で現れた文化的反義義のペアを分析する。そのような分析を通して、対比を示すペアの関係性や複数のペア間の対比度の格差、ジャンル内の意味のネットワークなどが見えてくる。ジャンルとしては、(a)移動手段・乗り物、(b)地域名・地名、(c)筆記用具の3つに注目する。

(a) 移動手段・乗り物

移動手段・乗り物関連の語としては、車が8回、バスが7回、またバイク、電車、徒歩がそれぞれ4回確認された。ペアとしては、

・電車／バス：4回、移動時（特に通学時）の公共交通手段の代表

・車／バイク：4回、移動時（特に通学時）の自らの移動手段

であった。公共の手段か、自分自身の移動手段かで、対比のペアが変わった。不思議なことに、学生にとって身近な通学手段の筈の自転車は、2回のみで頻度が低かった。これは、自転車と対比すべき有力な候補が意識しにくいからであろうと推測される。

(b) 地域名・地名

この分野では、関東／関西が7回、東京／大阪が5回出てきて、東京を中心とした関東圏と大阪を核とする関西圏の対比の構図が見られた。東西の対比が前面に現れるのは、東西に広がる日本列島の形状と主要都市の点在位置と深い関係があるであろう。東西軸が主流なのは、例えばドイツであり、南北軸は、ベトナム、ニュージーランド、イタリアでより重要であろう。一方、アメリカは、その長方形の形状から、東西軸と南北軸の両方が有効な国である。

また、大阪や関西出身または在住する学生に調査すると、ペアの前項と後項の順序が逆になる可能性が出てくるであろうことが予想される。順序に関しては、自分と関わりの深いところを優先して前項にするという地域的なバイアス（片寄り）とでも呼べる意識が働くと考えられる（ただし、

自分との関わりだけでなく、東京が首都で日本一の大都市であるという絶対基準がペアの前項を決めることもあるであろう。本調査で見られた他のバイアスについては、後でまとめる）。

（c）筆記用具

筆記用具のペアについて特筆すべき点は、鉛筆（本調査では平仮名書きのえんぴつが圧倒的に多かった）には複数の対比関係があるということである。

- ・えんぴつ／ボールペン：7回
- ・えんぴつ／シャープペン：4回
- ・えんぴつ／筆：2回

鉛筆は、データ全体で29回出現し、最も重要な筆記用具であることが分かる。一方、万年筆は1回も出てこなかった。鉛筆を中心に、消しゴム（16回、既出）、ボールペン、シャープペン、筆など対比の意味ネットワークが構築されていることが浮かび上がる。また、対比関係には、ペアにより強弱があることが、その出現頻度から推測される。今の学生のとっては、鉛筆書きか、ボールペン書きという対比が一番強いようだ。

（2）バイアス（片寄り）

今回の調査結果より、文化的反義語を特徴づける新たな視点として浮かび上がったのは、バイアス（bias, 片寄り）である。ここで言うバイアスとは、ペアの成立に特別な傾向が生まれることを指す。このバイアスの考えは、太田（1980: 621-624）を参考にしている。太田は、実際の談話中に生じる否定疑問文（例えば *Didn't he come here yesterday?*）では、話者は「肯定の片寄り」（positive bias）、つまり肯定の答えをより多く予想すると述べている。また、この様な片寄りは、文脈に左右される語用論的な概念であると結論づけている。

収集したペアのデータを分析する過程で、ペアの出現には、少なくとも2種類のバイアスが存在することが明らかになった。(a)前項バイアスと(b)

回答者の属性バイアスである。これらのバイアスは、標準的反義語には見られない、文化的反義語の特徴である。

(a) 前項バイアス

前項バイアスとは、ペアの最初に来る前項の語が、後項の語との組合せに影響を与えることを指す。例えば、山／海のペアを例にすると、山が前項の場合は、山を基準として、その対比として海、谷、川、里、野など考えられる。一方、海を前項とすると、今度は海が基になり、陸、空などと連想される語に変化が出てくる可能性が高い（実際、『広辞苑』と『デジタル大辞泉』には、「山」の項には反義語の記述は一切ないが、「海」には「陸」（りく）が反義語として明示されている。また、沖森 他（2011: 74）は、「山」を取り巻く反義関係を図解していて参考になる）。この様に、前項が後項の選択にバイアスをかけ、ペアのメンバーが変わることがありそう。他にどのような類例があるのか、文化的反義語の特徴として、今後詳細に調べる価値がある課題であろう（色彩語の対応関係に類例がありそう）。

(b) 回答者の属性バイアス

本調査では、回答者の均一性を確保する為の情報として、学生に最小限の属性（年齢、出身地・出身国、性別、日本語以外の母語）を記入してもらった。その属性が文化的反義語のペアに何らかの影響を与えることを、属性バイアスと呼ぶこととする。文化的反義語と回答者の属性の関連性を調べるのは、本調査の主眼ではないが、実際に分析を進めると、その関連性が際立つケースがあることが判明した。それは、ペアの前項と後項の順序や特定のペアの出現の有無についてである。

属性バイアスで一番顕著であったのは、性別バイアス、つまり性別による違いであった。既述のように、スカート／ズボンのペアを挙げた回答者は18人であるが、その内14人が女性で、圧倒的に多かった。さらに詳細にみると、スカートを前項としたスカート／ズボンのペアを挙げた回答者

は12人であるが、その内10人が女性であった。この順序には女性の視点が優先されていると言えるが、女性にとって身近なスカートが優先されるのは当然であろう。また、女性の体験から生じやすいペアとしては、ピアス／イヤリングが5例あったが、すべて女性からの回答で、男性からは皆無であった。スポーツ談義は、男性の雑談トピックであると先に述べたが、服装、装飾、化粧などは、女性の興味の対象であろう。

年齢バイアスの例では、今の若者特有のペアとして *Android / iPhone* が5例（4例は英語表記で、1例はカタカナ書き）あり、さらに現在の日本の携帯電話の選択肢として、ガラケー／スマホ（市場に登場した順）が6例あった。これらは、学生の日常生活には不可欠なペアであるが、特に前者は、高齢者には不案内なペアであり、今後数年で変化の波を受ける可能性が高い。

（3）文化の反映度

文化的反義語には、その言語の文化が反映されていて、背景知識となるスキーマの一部を構成すると考えられる。ただし、文化が反映される度合いには、強弱がありそうだ。今回の調査の中で、日本文化の特徴を比較的色彩濃く示していると思われるペアは、次の通りである：ごはん／パン（No.1）、肉／魚（No.2）、赤／青（No.7）、和式／洋式（No.8）、サッカー／野球（No.10）、北海道／沖縄（No.10）、行ってきます／ただいま（No.12）。これらには、日本の食生活、風俗・習慣などの一般知識に基づいたペアが多く、現時点での日本文化の特徴をよく示すペアだと言えるだろう。これらのペアは、日本語学習者にとっては、普通の辞書などには記載がないので学びにくい事項ではあるが、日本文化の特徴を知る格好の語彙ペアであり、学ぶ価値が大きい。また、教師にとっても教える価値が高い項目であろう。

一方、夏／冬（No.3）、犬／猫（No.4）、スカート／ズボン（No.4）、鉛筆／消しゴム（No.6）、晴／雨（No.9）、おはよう／おやすみ（No.12）、

都会／田舎 (No. 12), めがね／コンタクトレンズ (No. 12) などは、各々自然現象や現代の社会習慣に基づくペアで、日本文化固有の要素は少ないと考えられる。世界各地で程度の差はあるものの（少なくとも先進国では）共通の傾向を示していると言える。これらは日本文化と他文化との共通点を確認するペアとして、教授価値があるだろう。

最後に、対比ペアの安定度の観点から見ると、自然現象、地理や長期の社会習慣に基づいた比較的安定した例としては、例えば、夏／冬 (No. 3), 晴／雨 (No. 9), 北海道／沖縄 (No. 10), 和／洋など挙げられるであろう。一方、今後中・長期的に見て変化のありそうな例としては、サッカー／野球 (No. 10) がある。特に第2次世界大戦後、アメリカ文化の強い影響力の下に、野球が国民的なスポーツとして圧倒的な人気を集めてきた。しかし、1993年のプロリーグ化を契機にサッカーが勢いを着実に増しつつあり、若年層では野球を凌ぐ勢いである。しかし、長期的に見ると、この二つのスポーツが今後も2大勢力であり続けるかどうかは、予断を許さないであろう。

(4) 山田 (2019) との比較

既述の通り、本稿の目的は、大学生が日本語でどのような文化的反義語を意識しているか、実態を調査することであった。ここでは、今回の調査（特に出現頻度が高かった15ペア）と著者自身が収集した例（約170ペア）を紹介した山田 (2019) を比較して、その相違点を確認し、背後にある傾向を考察したい。

本調査の15例の内、山田 (2019) に出てこないペアは、以下の6例であった：夏／冬 (No. 3), 鉛筆／消しゴム (No. 6), 晴／雨 (No. 9), サッカー／野球 (No. 10), 都会／田舎 (No. 12), めがね／コンタクトレンズ (No. 12) である。これらを精査すると、大学生としての日常生活や実体験から生じるペアが多いことが見てくる。一方、テレビや新聞等のマスメディアで話題となっているような政治、経済、社会関連のペアは少な

かった（例えば、山田 2019 で紹介した衆議院／参議院（106 = 例の通し番号）、護憲派／改憲派（107）、派遣／社員（115）、ガソリン車／ハイブリッド車（168）など）。回答者の 8 割以上が大学 1、2 年生で、まだ時事問題への興味や意識が低いのかかもしれない。よく言われることだが、現在の学生は内向き志向で自分の身の回りのことに関心が向きがち傾向と無関係ではなさそうだ。

3.4 まとめ

本節では、文化的反義語の調査結果と分析の詳細を示した。3.1 で調査の目的、3.2 で調査方法を解説した後、3.3 以下で調査の分析結果を提示した。まず、収集したデータ全体の分析を論じ、その後、特に出現頻度が高かった 15 の文化的反義語のペアを詳しく解説した。それに続き、その他の分析結果として、まず特定のジャンル別に文化的反義語の分布状態を分析して示し、さらに前項の選択や回答者の属性に起因するペアのバイアス傾向に触れた。また、文化的反義語の中でも、文化の反映の度合に差があることに注目して、日本文化特有なペアとより普遍的なペアの区別を試みた。そして最後に、今回の調査で出現頻度が高かったペアと山田（2019）で紹介した例とを比較し、その違いを考察した。本稿の調査により、日本入大学生がどのような文化的反義語を意識しているかが実証されたことは、今後の研究の参照点となり、大きな意義があるであろう。

4. 終わりに

文化的反義語の研究は、文化的な背景に基づいた反義性を扱うので、意味論と語用論の交差する分野に属すると考えられる。特に文化的背景が言語使用に及ぼす影響を考察し、それを外国語教育に応用しようとする、異文化における言語使用の相違に焦点を当てる「異文化語用論」

(cross-cultural pragmatics) と呼ばれる分野と密接に関連するであろう。Huang (2012: 78) は、異文化語用論を「言語使用の体系的な研究, 特に異なる文化や言語における語用論的な違いを研究する」分野であると規定している。文化的反義語も、異文化比較の視点に重点を置きながら、体系的な研究をすべき課題であると考えられる。

今後の課題

今後の課題としては、次の3点を挙げる：

- ・まず、本稿の調査結果を踏まえ、日本語を学んでいる外国人学習者に日本語の文化的反義語の認知度を調査し、教授上のヒントを探ることである。
- ・文化的反義語を利用した語彙指導の具体例を提案したい。例えば、ジャンルごとに代表的な文化的反義語のリストを作成し、その活用法を提案するなどである。
- ・本稿では、2種類のバイアス（前項バイアスと回答者の属性バイアス）に触れたが、他にどのようなバイアスがあるか、事例の分析を踏まえてさらに詳細に考察したい。

これらの課題に取り組みながら、さらに体系的な研究を進めて行きたい。

以上、本稿が文化的反義語のより一層の解明に繋がれば幸いである。

謝辞

本稿の一部は、アメリカのワシントン DC で開催された Georgetown University Round Table 2018（通称 GURT, March 9-11, 2018）に於いて、“Discovering New Antonyms in Real Discourse: A Pragmatics of Cultural Opposites” というタイトルで口頭発表した。発表後の質疑応答で、貴重なコメントを数多く頂いたことに改めてここで感謝する。また、その年の GURT のメインテーマは、“Approaches to Discourse” で、長年ジョージタウン大学で談話分析の講義を担当しつつも、2017年に他界した Deborah Schiffrin 女史を追悼する学会でもあった。同氏には、著書の博士論文の副査（reader）をしていただき、的確なコメン

トを頂いたことをここに記して、心よりご冥福を祈りたい。

《注》

- (1) 和／洋の対比関係の記述は、『広辞苑』と『デジタル大辞泉』のどちらにもない。一方、和食／洋食、和服／洋服、和風／洋風の対比は両辞典にある。ただし、和式／洋式は『デジタル大辞泉』にはあるが、なぜか『広辞苑』にはなかった。また、和と洋は、そのまま「和洋」としても用いられて、「和洋折衷」（和風と洋風を程よく取り合わせて用いること）などの慣用句の一部ともなる。
- (2) かつてはペット動物用の病院を「犬猫病院」と呼ぶことが多かったが、ペットの多様化の結果か、今はあまり聞かなくなった。
- (3) 著者がアメリカの学会（GURT 2018）で口頭発表した時も、このペアに対比の意味合いがあるのかという質問やコメントがあった。参加していた台湾の研究者からは、このペアには物の機能を重視する東洋の見方が反映されているのではないかと、との指摘があった。著者はこの「東洋の見方」には不案内で、その有効性については議論の余地があるが、興味を引く指摘である。
- (4) 著者のアメリカの学会（GURT 2018）での口頭発表時にも話題になったが、この信号の青を、英語に直訳して使用すると誤解が生じることになる。日本語の青は、元来、英語の blue よりも示す色彩範囲が広く、野菜を意味する「青物」の青のように広く緑系統の色も含むので注意が必要である。文具の分野では、色つき鉛筆の代表として、赤鉛筆と青鉛筆がある。以前はよく赤と青が一本に合体した鉛筆も見かけた（「赤青鉛筆」や「朱藍鉛筆」と呼ばれ、今でも販売されている）。なお、信号機の色分けと同様に、海水浴場での遊泳情報を伝える旗の3色も青、黄色、赤で、それぞれ遊泳可能、遊泳注意、遊泳禁止を表わしているという（日本ライフセービング協会のHP：http://www.jla.gr.jp/what_ls/knowledge3.htm；閲覧日 2019 年 8 月 19 日）。

参考文献

- Hofmann, Th. R. 1993. *Realms of Meaning: An Introduction to Semantics*. Essex and New York: Longman.
- Huang, Yan. 2012. *The Oxford Dictionary of Pragmatics*. Oxford, UK: Oxford University Press.
- Jones, Steven, et al. 2012. *Antonyms in English: Construals, Constructions and*

- Canonicity*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- 宮地裕 (編). 2005. 『「日本語学」特集テーマ別ファイル (2) 意味Ⅱ』東京: 明治書院 (「対義語」部分は 1987 年 6 月号の再録).
- 森岡健二. 2005. 「私の対義語観」宮地 (編) 所蔵, pp. 68-71.
- Murphy, M. Lynne. 2003. *Semantic Relations and the Lexicon: Antonymy, Synonymy, and Other Paradigms*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- 中野弘三 他 (監修). 2015. 『最新英語学・言語学用語辞典』東京: 開拓社.
- 日本語文法学会 (編者). 2014. 『日本語文法事典』東京: 大修館.
- 沖森卓也 他. 2011. 『図解日本の語彙』東京: 三省堂.
- 太田朗. 1980. 『否定の意味』東京: 大修館.
- 大塚高信・中島文雄 (監修). 1982. 『新英語学辞典』東京: 研究社.
- 田中章夫. 2005. 「対義構造の性格」宮地 (編) 所蔵, pp. 77-88.
- Tannen, Deborah. 1994. *Talking from 9 to 5: Women and Men in the Workplace: Language, Sex and Power*. New York: Avon Books.
- Yamada, Masamichi. 2009. "Making More Sense of Antonymy in English." 拓殖大学語学研究 (言語文化研究所) 第 120 号, pp. 43-79.
- 山田政通. 2015. 「文化的反義語の試案——第 4 のカテゴリーとして——」拓殖大学語学研究 (言語文化研究所) 第 133 号, pp. 149-172.
- 山田政通. 2017. 「文化的反義語——英語の実例集——」拓殖大学語学研究 (言語文化研究所) 第 137 号, pp. 261-297.
- 山田政通. 2019. 「文化的反義語の試案——日本語の実例——」拓殖大学語学研究 (言語文化研究所) 第 140 号, pp. 237-267.
- Yule, George. 1996. *Pragmatics*. Oxford, UK: Oxford University Press.

【国語辞典】

- 新村出 (編). 2018. 『広辞苑』(第 7 版) 東京: 岩波書店.
- 松村明 (監修). 2012. 『デジタル大辞泉』東京: 小学館.

【反対語辞典】

- 北原保雄・東郷吉男 (編). 1989. 『反対語対照語辞典』東京: 東京堂出版.

資料：筆者が講義中に紹介した文化的反義語の例の一覧（13 ペア）

| No | 言語 | 文化的反義語ペア | | 対比のコンテキスト |
|----|-------|----------|-----------|------------------------------------|
| 1 | 日本語 | 山 | 海 | 地形の種類 |
| 2 | 英語-US | mountain | valley | |
| 3 | 英語-UK | bus | coach | バスの種類 |
| 4 | 英語-UK | single | return | 運賃・切符の種類 |
| 5 | 英語-US | state | federal | 行政区分 |
| 6 | 英語-US | paper | plastic | スーパーでレジ袋の選択 |
| 7 | 日本語 | そば | うどん | 麺の種類 |
| 8 | 日本語 | 和室 | 洋室 | 部屋の種類 |
| 9 | 日本語 | 国公立 | 私立 | 学校の区分 |
| 10 | 日本語 | いただきます | ごちそうさま | 食事時の挨拶 |
| 11 | 英語-US | For here | To go | ファーストフード店での注文時の選択（店内飲食か持ち帰り；地域差の例） |
| 12 | 英語-US | To stay | To go | |
| 13 | 英語-UK | Eat in | Take away | |

[注] 言語欄の「英語-US」はアメリカ英語を、「英語-UK」はイギリス英語を示す。

（原稿受付 2020 年 1 月 6 日）